

「オウレン」

國 兼 治 徳

父の生家は福井県にある。織田町という。読み方は「オタチョウ」である。県庁所在地福井市の東南約20kmの位置にある。又、国定公園越前加賀海岸の越前岬に近い山々に囲まれた地域で、盆地になっている。そもそも織田の地名は古く、荘園織田荘に由来する。又、織田信長の先祖はこの地にいたと記録にある。

父は折に触れ生家の話をした。従って、父の家のイメージが私の脳裏に出来上っていた。白壁の土蔵水車のある小川、柿の樹などが一幅の絵の様に想像することができた。父は24才まで福井に居たから、歳とともに故郷に寄せる思いが強くなったのも無理からぬことである。私は結婚して父と離れて暮すようになってから、父の元気なうちに父の生家を訪れてみようと考えていた。昭和48年夏、日本生物教育会全国大会が山口市を中心に開催され、その折に尋ねることにした。予め父に計画を話したところ、我がことの様に喜び連絡一切を引き受けてくれた。

大会の帰り道、武生市で下車し迎えの車で織田町の家に行った。戸主は既に父の長兄の孫の代になっていた。私は父の嫡子と言う立場で、丁重に迎えられた。代々名前を世襲する家柄だったので、藩主の直筆があったり、我が家にはない旧家の雰囲気を感じた。ただ、父が居た頃の家屋は上蔵だけが残っているだけで、水車もなければ勉強に使ったという部屋もなかった。50年近くも前の話であるから変るのは当然であるが、父の脳裏にある生家は、24才当時がベースになっていた。

人には誰も故郷がある。それは鄙びた寒村であろうと、都会の雑踏の中であろうと、幼児に体験した土の香りであり、風のかがやきであり、空気の匂いであろう。鮭が放流された河川のイオンを記憶している如く、人は故郷に思いを寄せる。父の生家を探ねて、父の少年時代を立体的に思い浮かべることができるようになった。厳格でつけ入る隙のない父が、急に身近に感じられるようになった。父の思い出を一部共有することになり、

今まで一方的だった父の話に、私なりの印象を加えることができた。

生家に寄ることが決った時、父からオウレンを採って来てほしいと頼まれた。劔神社の裏にいくらでもあるとの話だった。父が小さい時、胃腸薬としてよく飲まれたようである。生家の方にも話を通じていたらしく、オウレンの話を出すと生干しのオウレンを袋に入れて出してくれた。劔神社の裏にはすでにないと言う。それでも劔神社そのものが織田町の由緒ある神社である。社蔵の梵鐘は奈良時代のもので、国宝に指定されているので見学に出かけた。梵鐘の銘に[神護景雲四年九月十一日]とある。西暦770年のことで、東大寺大仏開眼の約20年後に铸造されたことになる。失礼な言い方だが、このような片田舎に国宝があることに驚いた。敷地は綺麗に草刈りされ、オウレンを探すわけにもいかなかった。私はそれまでオウレンを見たことがなかった。同じ科のミツバオウレンが雨竜沼にあって、知っていたぐらいである。オウレンは薬草である。漢字で「黃連」と書く。園芸の本には、10世紀ははじめにすでに薬草として使われていたと記録されている。昔からの健胃整腸薬である。主成分はアルカロイドのベルベリン、*berberine* C₂₀H₁₉O₅Nである。これは黄色の針状結晶をしていて、オウレンの根に含まれている。又、キハダの樹皮にも含まれ、漢方薬「黄蘗」がそうである。更にヒロハヘビノボラズ（びく）の根にも含まれていると言う。しかも、ヒロハヘビノボラズの学名は*Berberis amurensis*であり、ベルベリンの出どころは*Berberis*（メギ属）になりそうである。

織田町に入ったら、あちこち歩いて植物採集もしよう計画していたが、結局実行できなかった。折角見えたのだからと、永平寺をはじめ一乗谷、朝倉氏遺跡などや、野生スイセンで名高い越前海岸を車で廻ってくれた。私は歴史が好きなので、史跡めぐりを満喫して帰札した。又、戴いたオウレンは、調べもしないで父に渡してしまった。オウレンは図鑑によると道内にも分布していることになっている。いつの日かこの手に持って調べてみたいと思う。父は他界して久しいが、父の生家とは今は私が親戚づき合いをしている。